●優秀賞

楽しみ、助け合い、喜びを共感する生徒の育成

愛知県豊田市立石野中学校　安藤（あんどう）　司（つかさ）

1　はじめに

新学習指導要領では、健やかな体の基礎となる身体能力と知識を定着させ、身に付けた段階に応じ運動を豊かに実践していくための資質や能力を育てることが重視されている。一人一人の生徒が、基礎・基本の上に、何を学び、何を身に付けていきたいかを明確にし、自分なりの価値観をもって運動に向き合い、関わっていくことが大切になる。これは、自分が進むべき道を開き、自らの手で生きる力を育てることと言える。授業や学校生活の中で、こうした生徒の姿を見つけていく必要がある。

2　主題設定の理由

本校の生徒の様子を見ると、素直で明るい生徒が多いのが特徴である。しかし反面、小規模校ということで競い合うという場面が少ないため、他者との関わりの中で成長しようとすることや、苦手なことに挑戦する姿勢に乏しい。また、少人数であることやクラス固定のため、発表会など人の前で全力で行う姿が少なくなってきている。

器械運動の単元に入る前に生徒の意識調査を行った。現在の生徒の意識を知ることによって、個の単元における今までの問題点や改善点を見出すためである。はっきりと「嫌い」と答えた生徒が12名、「どちらかといえば嫌い」と答えた生徒が５名いた。本学級23名中17名が嫌いという、この数字には驚いた。「苦手だから」という理由がほとんどである。自分の苦手なものをみんなに見られることがさらに運動に対して消極的になる原因の一つである。また、成功体験を与えきれずに、器械運動を進めてきたことも原因として考えられる。さらには、個人での活動が多く、友達同士がアドバイスし合って共に技量を伸ばそうという意欲が欠けてきているのだと考える。

これらの実態を改善するために難易度の低い技であれ「できた」という成功体験を得ることが大切である。その経験から苦手意識を少しでも克服し、積極的に運動に取り組むことができるようになる。また、ペア学習等を取り入れて、教え合うことにより友達にも「できて欲しい」という気持ちが芽生えるようにしたい。その気持ちが、教えることや教えられることで相手の気持ちを考えた言動が大切となり、思いやりの心も育てられると考えた。苦手なことに対して、楽しみながら互いに助け合って、課題を達成できる喜びを共感できる生徒を育てたいと考え、この実践を行った。

3　研究の仮設

研究主題に迫るため、めざす生徒を下記のようにとらえ、研究の仮説を設定した。

めざす生徒

・共に助け合って活動をし、意欲的に運動に取り組むことができる
・自分なりの喜びを得ながら、運動に挑戦し、自分の能力に挑戦していくことができる

研究の仮設

仮説１：友達との関わりを多くもつことで、楽しみながらも粘り強い追究活動ができるであろう。 仮説２：課題追求の場を工夫することで、さらにレベルの高い技に挑戦しようとする意欲を高めることができるであろう。

4　研究の方法

研究仮説をもとに具体的な方法を考えてみた。

Ⅰ　研究の対象

第１学年１組　男女共習
男子11名　女子12名　合計23名

Ⅱ　研究の手立て

○仮説１に対する手立て

⑴　ペア学習制度

授業の初めに基本技のテストを行い、技能の高い生徒を選んだ。その生徒たちを軸にペア学習を行うこととした。技能が高い生徒がマンツーマンで教えて、ペアの成長が表れやすい種目を設定し、スキルテストを行うこととした。ペアの生徒ができていくことに喜びを感じ、教えることの楽しさを味わわせる中で、仲間とのつながりができることをねらいとした。

⑵　ミーティング（話し合い活動）

ペアに対してアドバイスをする際に、困っていることやアドバイスをしてもなかなかうまくいかない点などを出し合い、改善点を見つけていくためのものである。また、どんな声をかけたときに気持ちよく活動できるのかなど内面的なものにも目が向けられるように助言して、みんなが気持ちよく活動できることをねらいとした。

○仮説２に対する手立て

視聴覚機器の活用

ビデオカメラやデジタルカメラなどを活用することにより、自分の姿を客観的にとらえて修正するポイントがより明確になると考えた。さらに、遅延ソフトを導入し、無人による動画撮影を可能にした。遅延ソフトは自分が演技終了後に、自動で再生され見ることができる。これにより、自分の演技姿を見て改善点をその場で見つけられるのではと考えた。また、これから行う全ての種目にも必要性が高いと考える。

Ⅲ　見つめる生徒（抽出生徒）について

Ａ男は、運動能力が低く、器械運動は嫌いである。また、どんなことにおいても積極性に欠け、器械運動でも「別にできなくてもよい」という意識をもっている。そこで、ペア学習を通して、自分一人ではなく、仲間と助け合いながら活動を進めていく中で、自分や仲間が「できるようになる」喜びを感じさせたい。それにより、「できるようになる」楽しさを体感させ、様々な技に挑戦する姿勢を育てていきたい。

Ｂ子は、幼少期に体操教室に通っており、器械運動は好きである。しかし、「倒立前転」をとても苦手としており、周りの子にできない自分を見せることに大きな抵抗がある。そこで、Ｂ子には、苦手種目についてのアドバイスをし、段階を追って挑戦していけるよう、場の設定や仲間の声かけを大切にしていきたい。また、恥ずかしがることなく、自分の行っていることに自信がもてるよう声かけをし、少しずつ心を解きほぐしていきたい。

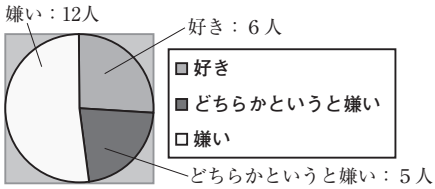
5　実践と考察

Ⅰ　生徒の実態

１年１組は男子11名、女子12名の計23名である。明るく素直で、何事にも頑張ろうとする生徒が多い。また、小学校のときから交流があり、男女の仲が非常に良い。そのため、互いに教え合ったり、励まし合ったりといった姿が学校行事の中で多く見られた。体育の授業では、準備や片づけを意欲的に行うことができる生徒が多くいる。しかし、小学校の授業で前転や後転などの技から倒立前転までは学習しているが、ほとんどの生徒が倒立や倒立前転は習得できていないのが現状である。

器械運動の単元に入る前に行った事前アンケートの結果は次のとおりである。（**資料１**）

器械運動では、技の難易度が一目瞭然となる。自分が行っている技をただ単に人と比較するとその優劣が自分にも他人にも分かってしまう。自分一人の力では、そのことが面白くなく、さらに自分の能力を追究することはおろか、体を動かすこと自体が嫌になってくる。自分の能力に合った技を一生懸命行うためには、友達同士が認め合ってどんな技であれ達成していく喜びを感じさせることが必要である。



好き、嫌いの主な理由	
好き	・技ができたときの達成感 ・難しい技を挑戦するのが楽しい ・きれいにできると嬉しい
嫌い	・できないから ・怖いから ・怪我をしたことがあるから

資料１　事前アンケート結果

Ⅱ　授業の内容

⑴　指導計画

生徒の実態もふまえ、**資料２**のように指導計画を立てた。

時間	内容と学習課程	指導評価
1	オリエンテーション　「授業の流れを知ろう」 ・特性の理解　・学習のねらい　・自己理解 ・学習カード　・視聴覚機器の活用の仕方	・器械運動の特性や成り立ちについて、学習した具体例を挙げている。 （知識・理解）
2	＊基本技練習＊　→　スキルテストに向けてウォーミングアップドリルの習得	・器械運動の学習に積極的に取り組もうとしている。（関心・意欲・態度）
3	基本技スキルテスト実施　＊ペア学習へ移行 ①前転 ②後転 ③開脚前転 ④開脚後転	・学習する技の合理的な動き方のポイントを見つけている。（思考・判断）
4	課題追求学習Ⅰ 「基本技を練習しよう①」　→　ペア学習	・仲間と学習する場面で、学習した安全上の留意点を当てはめている。 （思考・判断）
5	課題追求学習Ⅰ 「基本技を練習しよう②」 →　視聴覚機器の活用	・自分の課題を意識しながら練習し、滑らかな動作ができる。（技能）
6	課題追求学習Ⅰ 「基本技を練習しよう③」　→　教え合い活動	・技をよりよくできるように積極的に取り組んでいる。（関心・意欲・態度）

時間	内容と学習課程	指導評価
7	中間発表 「今までの学習の成果を発表しよう」	・学習した基本的な技を発展させて一連の動きで回ることができる。（技能）
8 9	課題追求学習Ⅱ 「課題技を体験しよう」	・技がよりよくできるようにすることに積極的に取り組んでいる。（関心・意欲・態度）
10 11	課題追求学習Ⅱ　プレ発表会 「発表に向けて課題技を完成させよう」	・器械運動の特性や成り立ちについて言ったり、書き出したりしている。（知識・理解）
12	本発表会 「今までの学習の成果を発揮しよう」	・良い演技を認めようとしている。（関心・意欲・態度）

資料２　指導計画

⑵　授業の実際

①　自己理解のための時間

（オリエンテーションと練習の時間）

〈第１時　オリエンテーション〉

オリエンテーションでは、これから進めていく器械運動についての内容とこの単元で大切にしていきたいことを確認した。その中でも特に重要となる次の点について確認した。

・単元の初めにスキルテストを行い、ペアを組んで基本技能の習得をめざすこと
・中間発表までの練習は、基本技を中心に行っていくこと
・発表会では、学習してきた技に課題技を組み込んで行うこと

〈第２時　基本技練習〉

ペアを決めるための基本技の練習時間を１時間とった。スキルテストで満点をとれる生徒と技能が低い生徒を組ませることにした。まじめな生徒が多いので、練習に熱心に取り組んだ。スキルテストは、前転、後転、開脚前転、開脚後転の四つとした。小学校で習得すべき技ばかりで低いレベルであるが、多くの生徒に達成感を味わわせたかった。また、恐怖心を少しでも和らげるためにウォーミングアップドリルを実施した。動物の真似や川跳び、背倒立、カエル倒立などを組み合わせて毎時間行うようにした。（**写真１**）また、段階ごとに技の合格レベルが明記された学習カードを準備したり、デジタルカメラやビデオカメラで自分の形をチェックできるように工夫した。ウォーミングアップドリルについて、生徒たちは次のような感想を書いていた。（**資料３**）

写真１　練習の様子

・楽しい！　動物の真似は全身を使っているという気がする。マットは怖かったけど、この練習ならできそう。次のマットが楽しみです。
・みんなでやるからめっちゃ面白い。動きが楽しいからどんどんやりたくなる。
・カエルは腕が痛くなるけど、隣の子には負けたくない。頑張って長い時間できるようになりたいと思います。筋トレとか家でした方がいいですか？

資料３　授業感想

②　ペアの決定

〈第３時　スキルテスト〉

３時間目に、ペアリーダーを決めるためのス

キルテストを行った。足を伸ばしたり、手のつき方など注意すべき点を意識しながら技を行う生徒が多かった。B子は、基本技なのですぐに合格した。A男は、前転を行うのがやっとであった。男子の合格者が５名、女子の合格者が６名であった。補助をしながら指導することが必要であったので男子は男子、女子は女子でペアを組んだ。リーダーの決定は教師が行った。A男には運動能力が高い生徒、B子にはコミュニケーションがとれる生徒をそれぞれに組ませた。器械運動では、初めてのペア学習のスタートである。

○仮説１に対する研究の手立て

〈第４～６時　基本技のペア学習〉

ペアのリーダーを集め、授業後の時間を使ってミーティングを行った。指導者としての心構えである。その中で特に重要視したのは、前向きな指導をして、その個人をけなすような指導は絶対にしないことである。その他にも、合格者を一人でも多く出せるように努力すること、その個人のどの部分がいけないのかを明確にしてあげること、誉めることによってモチベーションを上げること、さらには、視聴覚機器を効果的に活用すること、などを説明した。

ウォーミングアップドリルのスタートから、活発に活動がスタートした。今までなかなか活動量を確保できなかったが、ウォーミングアップドリルの導入で運動量が増した。ペアリーダーも視聴覚機器や準備した資料などを用いて指導する姿があった。特に良かったのは、デジタルカメラやビデオカメラを使って、ペアの姿を客観的に見せることができるようになった点である。（**写真２**）デジタルカメラは６台、ビデオカメラは全体で１台を準備して貸し出しとした。指導員としての心構えを説明したが、B子のペアの活動がややよくなかった。B子がリーダーという立場に慣れていなかったせいであろう。しかし、「ペアの子ができるように教えないと」という気持ちは感じられた。そして、２時間目にはポイントを示した掲示に、新たに自分でポイントを見つけ書き込むなど今までにない活動が見られた。（**写真３**）また、技の合格者が出るたびに、ペアだけでなく、全体で拍手や歓声が起きていた。まさにこちらが思い描いた形であった。

写真２　デジタルカメラの活用

写真３　ポイントに書き込みをするB子

そんな周りの雰囲気に飲まれてか、A男も合格したいという気持ちが芽生えてきた。その証拠にペアの子に撮影をお願いしたりアドバイスを求めるようになった。２時間目の終わりには、何とか後転の合格までにたどり着いた。そのときの全体の雰囲気はものすごく良かった。A男の授業感想は次のとおりである。（**資料４**）

> 合格した時ものすごくうれしかったです。器械運動は嫌いだけど、ペアの子が丁寧にポイントや補助をしてくれたのでできるようになりました。次回も頑張ります。

資料４　授業感想

３時間目に入ると、合格者が増え、ペア以外の子にもアドバイスする姿が多く見られるようになった。また、合格した生徒の「ありがとう」という言葉にペア、全体のつながりが深くなっ

ていった。今まで教えるということには無縁であったＢ子も見本を見せながら教えるようになった。この３時間を通して今までにない雰囲気の中で基本技の練習が行えた。ペア学習の中で「成功したい」「成功させてあげたい」と感じられる生徒が多くなっていった。また、このペア学習を通して自分のためだけではなく､「教えてくれた子のため」になど、いろいろな人の想いとともに練習できるようになったことも良かった点であった。人に教える喜びや達成感を得た生徒も多く、共に支え合って活動することができた。授業感想は次のとおりである。（**資料５**）

○教えた子が合格するとすごくうれしかった。教えることが自分の技に対する意識の向上につながった。　（Ｂ子）
○今までつまらなかった基本練習だけど、教えてもらうとすごくやりやすいし、教える楽しさが少しわかった気がする。　（Ａ男）

資料５　授業感想

③　発表会の決定

〈第７時　課題技の体験・ポイント説明〉

基本技の練習、テストが終わり、いよいよ本発表に向けて課題技を行うこととなった。今年は課題技を「倒立前転」一つに絞り、発表することにした。一つの技に絞ることによって、それだけに集中できるようにしたいと考えたからである。まずは、課題技をしっかりと理解することが大切である。そのため１時間みっちり使って説明し、教師が実際に補助をしながら練習をした。（**写真４**）ここからの４時間の練習の中で自分で課題追求がどこまでできるのか。その挑戦が始まった。

④　課題技に挑戦

○仮説２に対する研究の手立て

〈第８～10時　発表会に向けた練習〉

発表会では、今までと違う点や自分の能力に

写真４　教師による補助の様子

挑戦していくことが大切であると確認した。基本技の学習のようにアドバイスをし合って活動できれば最高である。また、発表会での演技構成を書かせてみると、人それぞれの演技構成になっており、器械運動に対する苦手意識や嫌う傾向が多少良くなっているように感じた。Ａ男、Ｂ子ともに自分なりの演技構成を考えていた。

それぞれの挑戦が始まった。コツコツと練習する生徒、いきなり課題技を決める生徒、どんな技を演技に取り入れるか模索する生徒などスタートの様子は様々であった。その中で、自分の課題を追究できるようにと､「３本の矢（場）」を用意した。パソコンに手本動画を見る場。デジタルカメラを準備しペアで見合える場。遅延ソフトで自らの演技を見られる場。この３本の矢（場）で練習を進めた。視聴覚機器を活用することで、生徒のさらなる主体性に刺激を与えたかった。

８時間目では、まずパソコンで動画を見た後、実際に練習する生徒は自分と手本の技の違いを見つけようと必死であった。そのため、パソコンの周りに多くの生徒が集まり、会話が弾んでいた。楽しく練習する雰囲気ができあがってきたと感じた。そして何より、生徒が自分から練習に取り組もうとする意識の変化がはっきりと見てとれた。（**写真５**）

９時間目には、セーフティーマット使い、倒立練習をする生徒も増えてきたため、教師二人の役割分担を決め、補助に入る形をとった。また、デジタルカメラを使い、互いの演技を撮影

写真５　ＰＣ動画を見る生徒

し合って、改善点を見つける光景が増えてきた。Ｂ子も始めはパソコンを見て練習していたが、ペアの子と一緒に練習する時間が多くなっていった。（**写真６**）特に課題技である倒立前転に力を入れて練習していた。ペアという枠を超えて、周りで見ている生徒が気づいたことは、アドバイスをするという場面が見られるようになった。お互いの良さを認め、さらにレベルを上げられるように技を磨き合う生徒たちの意欲が出てきたように思う。Ａ男もペアで活動する時間が増え、アドバイスを多くの生徒から受けていた。そのアドバイスを聞く表情は、自分の技を完成させたいという意志の表れであるように見えた。前転しかしなかったＡ男が跳び前転にチャレンジしたり、今まで何となく技を行っていた生徒が形にこだわり、技の完成度を上げようとしたりするなどそれぞれの成長が感じられた。時間を重ねるごとに各自練習も軌道に乗っていき、工夫が見られるようになった。マットを丸めて跳び前転を行ったり、ロイター板で坂道を作りそれを利用して後転や伸膝前転を行ったりと、それぞれ挑戦心を感じ取ることができた。また、Ｔ２教師が的確なアドバイスや補助をしてくれたことが、意欲向上につながった。教師の役割分担を決めておいた成果である。

写真６　デジタルカメラを活用する生徒

10時間目に入り演技の完成に向けて熱気を帯びてきた。課題技である倒立前転ができるようになった嬉しさから練習に力が入るあまり他の技の練習をするように指示をするほどであった。また、この時間から遅延ソフトを使い自らの演技を客観的に見る生徒が増えた。演技終了後10秒で映像が画面に出るようにした。これにより、技の上達度によって個人練習が可能となった。倒立前転を極めたい生徒の多くは、倒立時間や姿勢に問題があった。自分の演技を見て、「あ～だからか！」といった自分を見つめて課題を発見した発言が聞こえてきた。その声が聞こえ始めると他の生徒も自分の演技の完成度が気になり始めた。用意した遅延ソフトが大人気となった。どの生徒も、演技終了後にプロジェクターを介して映し出される映像を真剣に見て細かな点を修正していった。（**写真７**）１台だけの設置であったため、待ち時間が多くなった。プロジェクターで大きく映し出すことで、見やすさを追究した結果が裏目に出てしまった。まさか、ここまで意識が高まってくるとは予想していなかった。

写真７　遅延ソフトを活用する生徒

⑤　緊張感の中で技を成功させよう

〈第11時　プレ発表会〉

今までの練習の成果を見るためのプレ発表会を行った。１回にかける集中力やみんなが見る中での演技を行う姿に注目した。緊張感からく

る反省点をもとに、修正を加えて本発表に向かわせたかった。プレ発表を行う中でそれぞれの反省点、つまり修正箇所が出てきたが全体の雰囲気は非常に良かった。しかし、A男は練習してきた倒立が上手くいかなかった。今までのA男ならばこれで満足していただろう。しかし、「どうしてもできるようなりたい。練習がしたい」と申し出てきた。今回は特別に、発表中ではあったがT２教師にお願いして練習を許可した。（**写真８**）

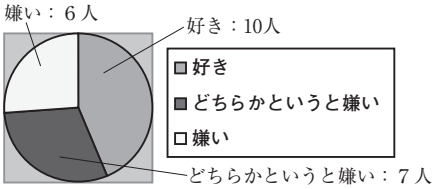
写真８
練習するA男

⑥　いざ、本発表！
〈第12時　本発表〉
いよいよ本発表が始まった。それぞれ緊張した様子を見せながらも各々の意気込みが感じられた。今までの成果が出たのか、人の演技でも真剣に見て拍手を送る姿が嬉しかった。A男は見事に倒立前転を成功させた。これにはA男だけでなく見ていた生徒が歓声をあげ、拍手の賞賛をした。A男は周りから出された祝福の手にタッチをして自席に戻るという、まさにヒーロー状態であった。支え合いながらの活動、認め合える環境の大切さをあらためて実感した。（**資料６**）

⑦　器械運動（マット）を終えて
本単元を終えてからあらためてアンケートを実施した。結果は、次のとおりである。（**資料７、８**）

○本当に嬉しかった。倒立ができなかったのに、本番で成功することができた。練習から教えてくれたみんなに感謝します。（A男）
○A男君ができた時は驚いたけど、自分もなんだかわからないけどうれしくなった。（生徒Y）
○誰か一人でも演技が成功したら、拍手が起こるので自分も頑張れた。ペアの子ができた時は自分も嬉しかった。一緒に練習してきたから味わえたことだと思う。（B子）

資料６　授業感想



資料７　事後アンケート結果

【好きになった主な理由】
・技ができるようになったから
・みんなに拍手されたから
・技のコツをつかめた気がするから
・できた時の嬉しさがあるから

資料８　生徒感想より

この結果の理由は、生徒同士が楽しみながら互いに助け合い、教え合う活動ができたこと。その中での「成功体験」がより実感をもてた大きな理由であると考える。

６　研究の成果と今後の課題

Ⅰ　研究の成果

今回の実践では、互いに楽しみながら助け合って、成功体験を実感できることに重点をおいて取り組んだ。基本技の練習をペアで実践し、認め合う活動の中で、あらためて生徒同士の力を信用することの大切さを実感した。また、視聴覚機器を使用することや学習カード、掲示物の工夫をすることも、ペア活動をより効果的に

進める要因となった。どの生徒も、友達から誉めてもらえることが大きな意欲となった。また、小学校から交流があったからこそ、お互いに認め合って自分の能力を追求していこうという意欲につながり、さらに一人の成功を皆で喜べる雰囲気を生み出せたと考える。

Ⅱ　今後の課題

一つは、友達同士が共に支え合って活動することができ、喜びを共感するという点では効果的な授業であった。しかし、３年間を見通した計画をしっかりと立てて個人のできる技のレベルを上げていく必要があると感じた。成功体験をさせたいというねらいはあったが、３年間を見通して授業を組み立てたい。また、教師の補助レベルもアップさせる必要があると感じた。今回も、教師同士で補助の練習を確認しながら授業に臨んだ。今回の課題技では、大きな問題はなかったが大技に挑戦させる際は補助がしっかりしていないと成功に近づけない。教師の指導力向上をめざしたい。

二つめは、課題技一つに絞って発表会を行ったことである。技を追究していくには良かったが、一つの技に固執しすぎてしまったため、マット運動で大切となる技のつながりがなかった点である。３年間を見据えれば、マット一枚を使った演技構成ができるようにすることが望ましいと考える。そのため、課題技だけでなく、マット運動に必要な技と技をつなぐ練習時間を確保する必要があったように思う。

7　おわりに

今回の授業実践を通して、楽しみながら互いに助け合って課題を達成できる喜びを共感する授業の組み立てができた。一人一人の技の完成を認めながら進んでいく。全員が成功体験の喜びを知り、周りの仲間も認めていける。理想的な形であった。教師がしっかりとした手立てを講じれば生徒たちは、意欲的に活動できることが確認できた。生徒たちの成功したときの笑顔や喜ぶ様子は、何事にも変えがたい喜びであった。また、一つの成功体験が自分に自信をもたせ、さらに上をめざす。そのために何をしたら良いのかを考えて、求めてくる。保健体育の授業だけにとどまらず学校生活の中でも必要になってくる構図であろう。私自身教員生活10年目になるが、生徒たちが生き生きと活動できるような学校づくりをめざして成長していきたい。日々、生徒たちと共に生活し、喜びを共感できるように。